

けて突留る、一鎗失ときは、熊の一揆に一命を失ふ、その危を踏で熊を捕は、僅かの黄金の爲也、金慾の人を過事、色慾よりも甚し、されば黄金は道を以て得べし、不道をもつて得べからず、又上に覆ふ所ありて、その下には雪のつもらざるを知り、土穴を掘て蟄るもあり、然れどもこゝにも三五尺は吹積也、熊の穴ある所の雪には、かならず細孔ありて管のごとし、これ熊の氣息にて雪の解たる孔也、獵師これを見れば、雪を掘て穴をあらはし、木の枝柴のるるを穴に挿入れば、熊これを搔とりて穴に入る、かくする事しばくなれば、穴逼りて、熊穴の口にいづる時、鎗にかくる、突たりと見れば、數疋の猛犬いちどに飛か、りて囓つく、犬は人を力とし、人は犬を力として殺もあり、此術は控木にこもりたるにもする事也、

〔日本山海名産圖會〕捕熊 熊の一名子路

熊は必大樹の洞中に住みて、よく眠る物なれば、丸木を藤かつらにて格子のごとく結たるを以て洞口を閉塞し、さて木の枝を切て其洞中へ多く入るれば、熊其枝を引入れ、て洞中を埋終におのれと洞口にあらはるを待て、美濃の國にては竹鎗因幡にては鎗、肥後には鐵炮、北國にてはなたきといへる薙刀のごとき物にて、或は切或は突ころす、何れも月の輪の少上を急所とす、又石見國の山中には昔多く炭焼し古穴に住めり、是を捕に、鎗鐵炮にて頓にうちては膽甚小さしとて、飽まで苦しめ憤怒せて打取なり、又一法には、落しにて捕るなり、是を豫州にて天井釣と云、又チソ阿州にておすといふ、チスハチン其様圖略、圖にて知るべし、長さ二間餘の竹筏のごとき下に鹿の肉を穴に燻べたるを餌とす、又柏の實シャ、ハキ實なども蒔也、上には大石二十荷ばかり置く、又阿州にて七十五ものなれば、落る時の音雷のごとし、落て尙下より機を動かすこと三日ばかり、其止時を見て石を除き、機をあぐれば、熊は立ながら、足は土中に一尺許り踏入て死することみなしかり、又一法に陥し穴あれども、機の制に似り、中にも飛驒加賀越の國に